

おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御
ころごし、ひとえに往生極樂のみちをといきかんがためなり。しかるに念仏よりほかに
往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、ころにくくおぼしめしておわ
しましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にも、ゆゆし
き学生たちおおく座せられてそうろうなれば、かのひとにもあいたてまつりて、往生の要
よくよくきかるべきなり。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせを
かぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

南第3組 光福寺住職

金石 晃陽

text by Kouyou Kanaishi

第2章 「ただ念仏して」

「念仏ひとつで本当に救われるのか」。これが、関東の地より、はるか京都の聖人にまで、
身命をかえりみず尋ねてこられた門弟達の問いであったに違いない。聖人が京都にもどら
れて二十年余り、関東の門弟を動揺させる二つの事件があった。一つは、「念仏無間」とい
う日蓮の念仏批判、二つは、長男善鸞による「ただ念仏」への批判である。しかし、聖人
晩年の『御消息』を読む限り、日蓮の念仏批判よりも、慈心房善鸞の影響が大きかったこ
とが知らされる。その善鸞の言動の中身を、聖人八十四才の「義絶状」で確認すると、

- ① 慈心一人に、よる親鸞がおしえたるなりと、人に慈心房もうされてそうろう
『御消息拾遺』（聖典六一一頁）
- ② 第十八の願をば、しぼめたるはなにたとえて、人ごとにみなすてまいらせたり
『御消息拾遺』（聖典六一二頁）
- ③ 余のひとを強縁として念仏ひろめよともうすこと 『御消息集』（聖典五七七頁）

①は、善鸞が「親鸞の教えは秘伝」であり、(親子=一子血脈)の「血統」という「貴人
信仰」を主張し、②では、「ただ念仏して」の「ただ」を否定したのである。③では、念仏
者以外の権力体制を利用して、自分の主張の正当化をおし通そうとした。その結果、慈心
房にすかされて、「信心みなうかれおうて」、「日ごろひとびとの信のさだまらず」、「日ごろ
の信のたじろぎおうて」いることを、「あさましくそうろう」、「かなしくおぼえそうろう」、
「不便にそうろう」と悲歎しつつも、「詮ずるところは、ひとびとの信心のまことならぬこ
とのあらわれてそうろう」と述べ、門弟の信心の動揺を「よきことにてそうろう」と、言
い切られた。「よかったではないか」と。信心と思っていたものが、「うかれ、さだまらず、
たじろぐ」ような信心でしかなかったのであると。「まことの信心(金剛心)」ではなかつ
たことがはっきりした。それこそ、「よきことにてそうろう」と。(同頁)

では何故、善鸞の言動に動揺したのか。「ただ念仏」の「ただ」に迷ったのであろう。

「唯」は、ただこのことひとつという。ふたつならぶことをきらうことばなり。

『唯信鈔文意』(聖典五四七頁)

「ただ念仏」の「ただ」は、どこまでも「唯」であって、決して「徒(あれもこれも=諸善万行の一つ)」や、「只(それだけをひたすらに=一心不乱)」の「ただ」ではない。「徒(19願)」も「只(20願)」も人間の分別心(ふたごころ)であるからこそ揺らぐ。それを徹底して見破るのが「唯(18願)」という「本願成就の一心」である。

曇鸞は、『論註』「下巻」において、名号の「破闇滿願」の徳を讃えた上で、「称名憶念しても、無明なお存して志願が満足しないのは何故か」と、問いを出し、それは、「如来の二身、実相身(真如法性そのもの)・為物身(衆生の為の身)であることを知らない」上に、「三種の不相応あり」として、不淳心(信じたり疑ったり)・信心不一(決定しない)・不相続(称名に人間のはからいが雑じる)。この三不信と相違するのが、「如実修行相応」であり、それが、世親の「我一心」であることを確かめておられる。(聖典二一三~四頁)

「ただ念仏して」の「唯」(我一心)こそ、念仏に出会いながら、「徒」「只」という「三不信」を離れることのできない私の信の在り様を明らかにし続けて下さるのである。